

国道9号線建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
(布田遺跡)

1989年3月



道工事事務所
育委員会



銅鐸形土製品出土狀況

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、松江バイパスを建設しています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることの出来ない文化財については道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。当バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに昭和50年度以降現在まで約3億5千万円の費用を投じ発掘調査を実施しております。

本報告書は、昭和63年度に実施した布田遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成元年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長

土 嶋 知 己

序

島根県教育委員会では昭和63年度、建設省中国地方建設局の委託を受けて、一般国道松江バイパス建設予定地内の布田遺跡の調査を実施致しました。

松江バイパスの調査は、昭和50年度から昭和57年度にかけて現在使用されている二車線の暫定道路部分の調査を行い、昭和61年度からはその隣りの本道建設部分の調査を実施しております。

本年度の調査区は昭和55年度調査区の隣地にあたり、弥生時代前期後葉～中期後葉と考えられる旧河道路跡や、弥生時代中期の土墳、弥生時代中期および古墳時代中期の溝跡等が検出されました。この内、旧河道路跡からは、木製農耕具を加工する時に使用したと考えられる円形杭列状遺構が10箇所以上確認され、木器製作工程を知るうえで貴重な知見を得ることができました。出土遺物では、銅鐸形土製品や、分銅形土製品といった祭祀遺物も確認されています。今回の調査結果を検討すると、附近に弥生時代の大規模な集落跡が存在することを示唆しています。

本書が出雲の古代文化の中心となった意宇川下流域という地域の歴史を解明する手がかりとなり、また広く埋蔵文化財に対する理解と関心を多少なりとも高めることに役立てば幸いです。

なお、調査にあたり、御協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

島根県教育委員会

教育長 松井邦友

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和63年度に実施した一般国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査概報であり、平成元年度布田遺跡発掘調査の結果と合わせて、本報告を作成する予定である。

2. 本年度は、布田遺跡の調査を実施し、発掘地は次のとおりである。

布田遺跡——島根県松江市竹矢町字平田1205の3他

3. 調査組織は次のとおりである。

事務局 内藤仁男（文化課課長）、井原 譲（同課長補佐）、勝部 昭（同課長補佐）

野村純一（文化係長）、吉郷朋之（文化係主事）、陶山 彰（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 ト部吉博（文化課埋蔵文化財第3係長）、北脇孝夫（同教諭兼主事）、八幡賢一（同教諭兼主事）、萩 雅人（同主事）

調査指導者 山本 清（島根県文化財保護審議会委員）、池田満雄（同）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、林 正久（同教育学部助教授）、甲元真之（熊本大学文学部助教授）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所建造物研究室長）、永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授）、高橋 譲（岡山県立博物館学芸課長）、伊藤 実（広島県立埋蔵文化財センター調査研究員）

4. 本書で使用した遺物略号は次のとおりである。

SD—溝、SB—堀立柱建物跡、SK—土壤、SP—ピット

5. 本書で使用した方位は磁北を示す。

6. 本書の執筆、編集は調査員が討議してこれを行い文責は目次に表記した。

7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は建設省松江工事事務所作成のものをトレースして使用した。

8. 本遺跡出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

目 次

I. 位置と環境	(萩)	1
II. 調査に至る経緯	(北脇)	3
III. 調査の経過	(北脇)	3
IV. 遺跡の概要		
第Ⅰ調査区	(北脇)	4
第Ⅱ調査区	(北脇)	8
第Ⅲ調査区	(萩)	13
第Ⅳ調査区	(八幡)	18
第Ⅴ調査区	(八幡)	21
V. ねすび	(卜部・八幡・北脇・萩)	23

I 位置と環境

今回調査を実施した布田遺跡は、松江市竹矢町字布田とその周辺に所在し、意宇平野の中央部に近い微高地に立地する。最初に弥生時代の遺跡として紹介されたのは、近藤正氏^(註1)によってである。その後、昭和49年に県教委により国道9号線バイパス建設に伴う試掘調査が行われ、また昭和55年から56年にかけて暫定道路予定地内の本調査がおこなわれた。^(註2)この結果、弥生時代前期～中期の溝状遺構を中心として、土壇、住居跡状遺構、古墳時代の溝、土壤等多くの遺構や遺物が検出され、沖積平野における弥生～古墳時代の集落のあり方を解明する手がかりを得ている。

周辺の遺跡 繩文時代の遺跡は意宇平野の縁辺や馬橋川下流域附近の低湿地に点在しており、竹ノ花遺跡、竹矢小学校校庭遺跡、法華寺前遺跡、才塚遺跡、さっぺい遺跡等が知られている。

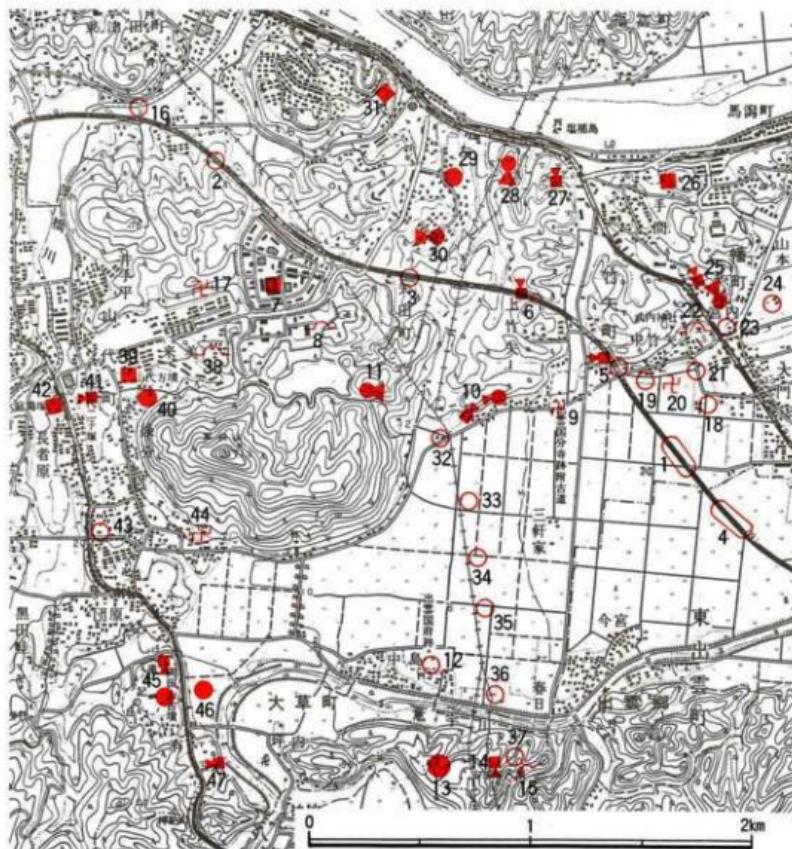
弥生時代の遺跡としては中竹矢後遺跡、大敷遺跡、宮内遺跡、三軒茶屋遺跡、上小紋遺跡、向小紋遺跡等が知られる。中でも大敷・上小紋・向小紋遺跡からは、弥生時代後期頃の水田址が検出されており、附近には同時期の集落が存在するものと思われる。後期後半になると的場土壇墓や四隅突出型の来美埴丘墓が出現する。

古墳時代に入るとこの地域には多数の古墳が造営される。古墳時代中期には大庭船塚（方墳、一辺42m）、手間古墳（前方後円墳、全長約70m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳、全長約57.5m）、石屋古墳（方墳、一辺40m）、竹矢岩船古墳（前方後円墳、全長47m）等の多くの大形古墳が築造される。中期後半になると墳丘規模が前方後方墳としては県内で最も大きい山代二子塚古墳（全長70m）が築かれる他、意宇平野南方の丘陵に西百塚、東百塚古墳群や後谷、荒神谷古墳群といった大規模な群集墳が形成される。後期に入ると、横穴式石室をもつ岡田山1号墳（前方後方墳、全長約24m）や御蔭山古墳（前方後方墳、全長約40m）が築造される一方で、古天神古墳（前方後方墳、全長約25m）、岩屋後古墳（原形不明）、山代方墳（一辺45m）といった石棺式石室をもつ古墳が盛行期を迎える。ほぼ時期を同じくして、意宇平野周辺の丘陵斜面には横穴墓が築かれる。横穴墓の中には、安部谷・十王免・孤谷横穴群のように石棺式石室の形態を模したものが多くみられ、古墳と横穴墓の被葬者が密接な関係にあったことを推測させる。

律令時代には、意宇平野に国庁の他、山代郷正倉や出雲國分寺、國分尼寺、國分寺瓦窯等が設置され、出雲国の政治中心地となっていた様子が窺われる。

註1 近藤 正「出土品」『鳥取県文化財調査報告書』第五集 1968年

註2 鳥取県教育委員会「布田遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財調査報告書』1983年



第1図 布田遺跡の位置と周辺の遺跡

- 1. 布田遺跡 2. 勝負遺跡 3. 平所遺跡 4. 夫敷遺跡 5. 中竹矢遺跡・中竹矢1号墳
- 6. 才ノ峠遺跡・才ノ峠1号墳 7. 来美古墳 8. 十王免横穴群 9. 出雲国分寺跡
- 10. 上竹矢古墳群 11. 遊田古墳 12. 出雲国府跡 13. 百塚山古墳群 14. 古天神古墳
- 15. 安部谷横穴群 16. 石台遺跡 17. 来美廣寺 18. 宮内遺跡 19. 出雲国分寺瓦窯跡
- 20. 出雲国分尼寺跡 21. 平浜八幡宮前遺跡 22. 代官家後横穴群 23. 的場土壙墓
- 24. さっぺい遺跡 25. 迎接寺古墳群 26. 瀧山古墳 27. 竹矢岩船古墳 28. 手間古墳
- 29. 井ノ奥古墳群 30. 井ノ奥4号墳 31. 石屋古墳 32. 間内遺跡 33. 上小紋遺跡
- 34. 四配田遺跡 35. 神田遺跡 36. 大屋敷遺跡 37. 天満谷遺跡 38. 狐谷横穴群
- 39. 山代方墳 40. 山代円墳 41. 山代二子塚 42. 大庭鶏塚 43. 山代郷正倉跡
- 44. 四王寺跡 45. 岡田山古墳群 46. 岩屋後古墳 47. 御崎山古墳

II 調査に至る経緯

今回の布田遺跡の調査は、昭和55～56年に行った暫定道路部分の隣接地にあたる本道工部分についてである。

国道9号線松江東バイパスは、6車線が計画されており、昭和57年に行われた鳥根県主要関連道路として併用するために、55・56年の2ヶ年にわたって計7遺跡（春日遺跡、夫敷遺跡、布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ仲遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）の調査を行った。

その後、60年度に建設省から国道9号線松江東バイパスの残り4車線の本道工部分の調査依頼があり、協議の結果、61年度に春日遺跡から調査を行った。

本年度は、本道工部分の調査に入り3年目であり、松江東バイパスのルート内の布田遺跡の調査を行うことになった。

III 調査の経過

今年度調査を実施した区域は、布田遺跡の南東部分にあたる。4月26日～5月6日において調査区内の表土・表土を重機により掘削し、その後、耕作土を除去したところ遺構が確認され直ちに精査を行い、溝状遺構5本（SD01～SD05）を検出した。周辺からは、土壤及びピット状遺構が検出され、6月6日遺構の尖測及び写真撮影をもってI区の調査が終了した。順次南に調査区を移動することにし、第II調査区からは、多くの溝状遺構・土壤・ピット群を検出した。さらに前回調査で確認された深い落ち込みが検出され、この落ち込みには厚い包含層が認められ、多量の遺物が出土した。この落ち込みは深いところで遺構面から3m近く低くなり、また底からは湧水があり調査が難渋した。そして、円形杭列等の遺構を検出し8月4日II区の調査を終了した。第III調査区～第V調査区では、上層の遺構は、I区で溝状遺構がわずかに1本検出されたにすぎなかったが、南北トレンチを入れたところ、II区で確認された包含層が全域で見られ、調査の都合上、IV・V区から順次全面掘り下げを行った。IV区では、底の砂疊層に至るまで、多量の遺物が出土した。9月30日IV区終了後、直ちにV区に入り、包含層から遺物を取り上げ、10月14日底を検出し、精査・尖測・撮影した上でVI区の調査を終了した。そして第III調査区にもどり、旧河道の肩部を検出しながら掘り下げを進めていき、円形杭列遺構を検出するとともに大量の遺物を採取した。そして、12月15日、調査区全域の周囲の状況を平板実測して調査全口程を終了した。

註1 島根県教育委員会「布田遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』1983年

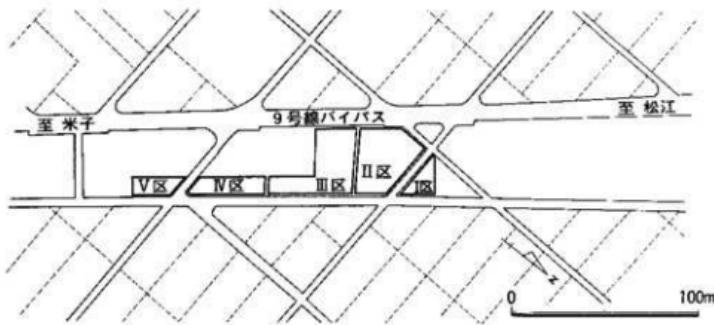
IV 遺跡の概要

今回の調査では、調査区を9号線バイパスに沿って約160mの範囲内に5ヶ所設定した。さらに便宜上、北側の調査区からI～V区と呼ぶことにした。調査区をI・II区及びIV・V区を東西に走る農道によって区分し、I・II・IV区はバイパスに直交する水路によって区分した。(第2図)以下、各調査区ごとに遺構、遺物についてその概略を述べていく。

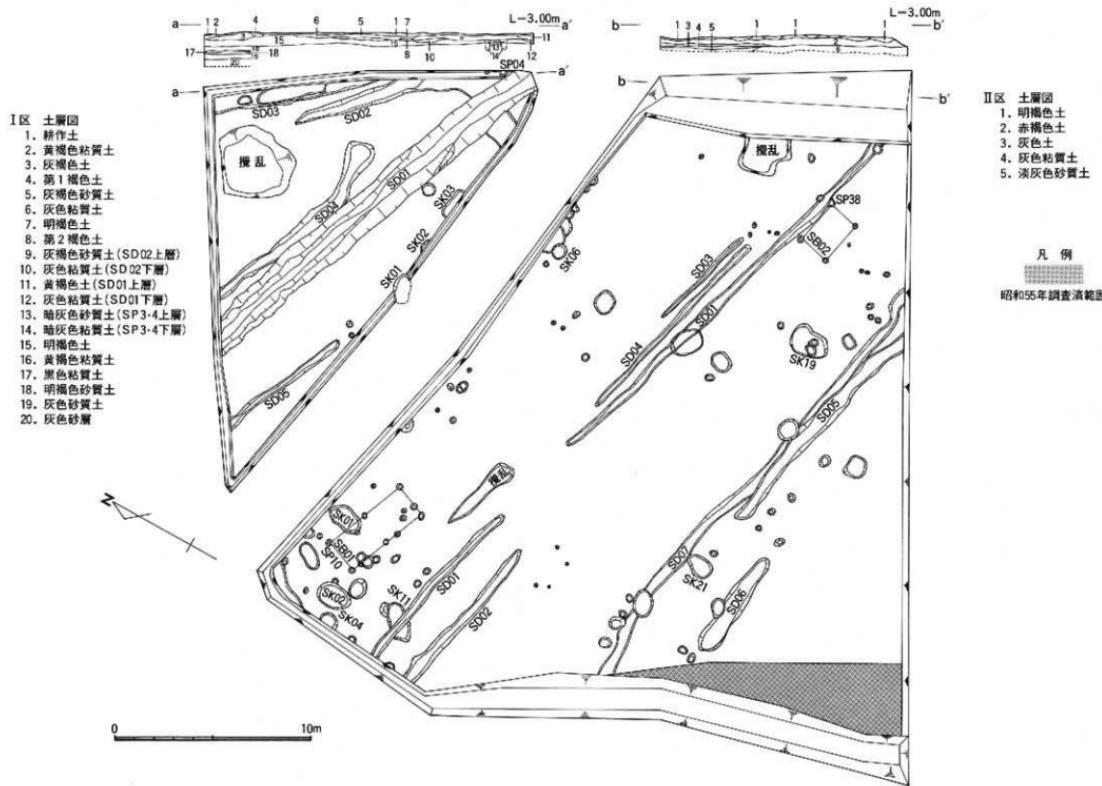
第I調査区 遺構は耕作土を除去した段階で明褐色土に掘り込まれていた。掘り込みは浅く、遺構面が削平された可能性がある。遺構は溝状遺構5、土壙3、ピット5が検出された(第3図)。

溝状遺構 SD01は、東西方向に走り、幅1.35m～2.07m、深さ16～40cmで西から東に向かって徐々に浅くなる。埋土2層に分層でき、上層は黄褐色土、下層は灰色粘質土になっている。出土遺物は古墳時代の遺物が多く、特に土師器高杯形土器の出土点数が多いのが特徴である。その他、弥生土器の細片も少量ではあるが出土している。SD02、SD03は調査区の東壁に沿って走りSD02は、調査区の南東より南に湾曲しSD01に切られ南壁にむかっている。幅0.63m～1.5m、深さ17cm～30cmである。SD03は東壁に阻まれ、東肩の検出が不可能であり幅は不明である。深さは7cm～15cmと浅い。SD02からは弥生土器の細片が数点出土し、SD03からは硬質砂岩製の石鏃が1点出土した。SD04はSD01に並行して走り、部分的にSD01に南肩を切られている。幅0.62m、深さ11cmである。弥生土器片が僅かに出土している。SD05は調査区の南西隅で検出され、東西方向に走り、幅0.4m、深さ11cmである。出土遺物はなかった。

土壤 土壤はすべて南壁際で検出された為、南半分を壁もしくは排水溝で切られており、完全な形を検出することができなかった。SK01は現存長1.5m、幅0.55m、深さ35cmで、ほぼ梢円形を呈す



第2図 調査区配置図

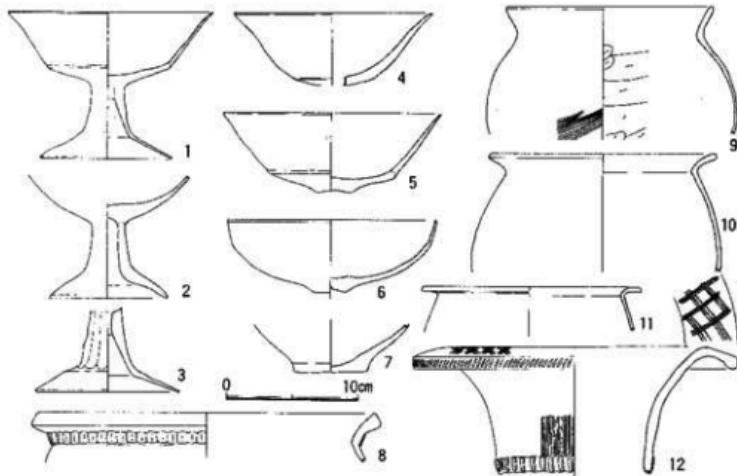


第3図 I区及びII区(第1造構面)造構配置図

ると推定される。埋土は上層が赤褐色土、下層は灰色粘質土になっており、下層上面から弥生土器及び、緑色凝灰岩製の管玉未製品が出土した。SK02は現存長1.0m、幅0.62m、深さ15cm、SK03は現存長1.65m、幅0.4m、深さ6cmである。SK03は上面から弥生土器の細片が出土したがSK02は出土遺物はなかった。

ピット状遺構 東壁際のSP04は径36cmの円形ピットで、深さが52cmである。堆積土は2層に分層され、下層の暗灰色粘質土から柱穴痕と思われる木片が出土している。

出土遺物（第4図） 1～6はSD01の上層から出土した土師器高杯形土器である。形態をみると、2・6のように杯部の口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がるタイプと、1・4・5のように、水平方向にひびる杯底部に外反して開く口縁部が続き、杯底部と口縁部の接合部に段を成すタイプがある。3の脚部については、形態、調整から後者に統するものと考えられる。菱形土器は、9のように口縁は単純でくの字状に外反し、器壁はやや厚い。10・11は弥生壺形土器で、口縁部がくの字に屈曲し、内面に棱が立つ。8はSD02出土の菱形土器で口縁端部が肥厚し、頸部に指頭圧文を有する貼付突帯を巡らす。7は、SD04出土の弥生土器底部である。12はSK01出土の壺形土器で、口縁部が朝顔状に外反し、上面に斜格好文、端部に刻目文を施し、頸部に貼付突帯を巡らす。出土遺物の形態や、遺構の切り合い関係からみると、SD01は古墳時代中期の溝で、他の溝及び、SK01、SK03は弥生時代のものと推測される。また、SD01は方向、埋土、出土遺物の様相が前回調査で検出されたⅠ区SD12と類似しており、同一のものと推定する。



第4図 第I調査区出土遺物

第Ⅲ調査区 遺構は北側では赤褐色土層に、南側は砂質化した明褐色土層に掘り込まれており、溝状遺構7、土壙27、ピット73の他、ピット群から堀立柱建物2棟を復原した（第3図）。

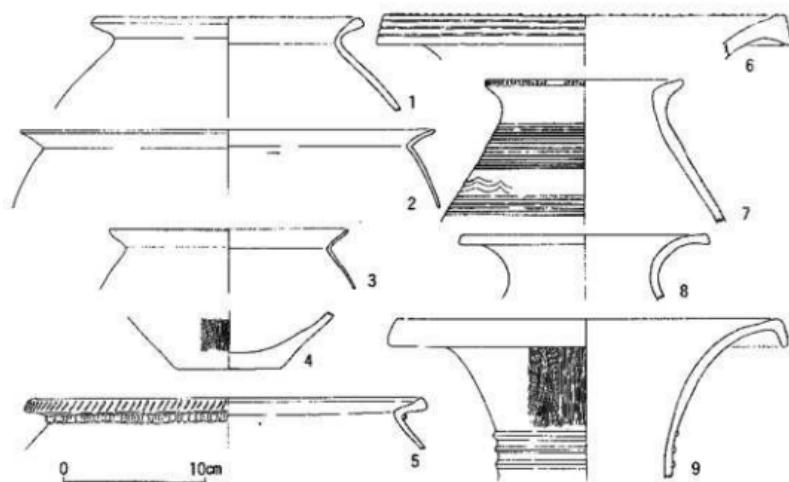
溝状遺構 すべて東西方向に走っており、総じて掘り込みが浅い。SD01は西壁際から東に約10.5m付近でとぎれた後、東で続きの溝が検出された。幅は0.45～0.6m、深さ15cmである。SD02は埋土に耕作土が入り攪乱であった。SD03・SD04は、SD01に沿うように走り、ともに現存の深さが浅く土層の確認が十分できなかった。SD05は幅0.6～1.0m、深さ20～30cmで、弥生中期中葉～後葉の土器片が出土している。SD06は幅0.68～0.98m、深さ32cmで弥生土器の細片が出土している。SD07は調査区西部から南壁にかけて走り、幅0.62～0.72m、深さ16～20cmでSD05に切られ、南壁際でやや北に弯曲する。弥生中期中葉～後葉の土器が出土している。

土壙 調査区の北西部では、掘り込みも深く、土器片がかなり出土している。それに対して、南東部では掘り込みが浅く、僅か数cmのものもあり、土器も上部を削られたような状態で出土している。平面プランをみると、梢円形が多く、次いで円形、隅丸方形の順になっている。大きさは様々で、最大のものはSK19の長さ2.0m、幅1.5m、最小はSK06の径0.8mの円形の土壙であった。

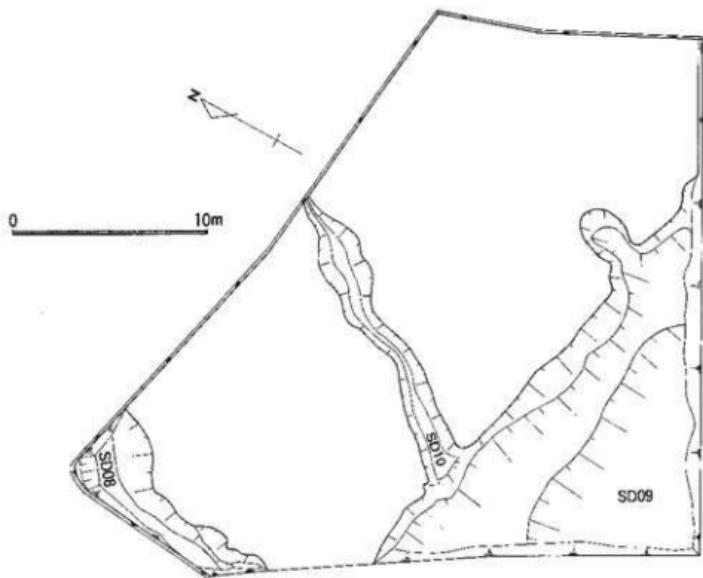
堀立柱建物 ピット群から復原された2棟の堀立柱建物のうち、調査区の東西隅にあるSB01は1間(1.8m)×2間(4.5m)の東西棟の建物跡で、建物軸方向はN68°Wを測る。柱穴は円形プランである。6個の柱穴の内、SP10から弥生土器の細片が出土している。SB02は、1間(1.8m)×1間(2.3m)の東西棟の建物で、建物軸方向はN79°Wである。柱穴は円形プランで、SP38は、SD01に切られている。

出土遺物（第5図） 溝状遺構から出土した土器は細片磨滅の為図示し難いものが多い。3・6はSD05出土土器片である。3は口縁部がくの字形になり内面に稜が立つ。5の甕口縁部はSD07出土で、端部が肥厚し、外面には刻目文を施し、頸部に指頭圧文を有する貼付突帯を巡らす。4はSD06出土で、形態から甕の底部の可能性がある。6は壺形土器の口縁部で、3条の凹線文を巡らせ、内面には指頭圧文を有する貼付突帯が巡る。5・6は中期後葉の形態に統する土器である。土壙から出土した土器は1・2、7～9で、7はSK02の底附近から出土したもので、口縁は短く緩く外反し、端部には籠状工具による刻目文を施し、頸部及び肩部に櫛描きによる平行沈線や、波状文を巡らせる中期前葉の壺形土器である。2はSK04出上で、器壁が薄く、端部がくの字に屈曲している中期中葉のものと考える。1・8・9は、それぞれSK01、SK21、SK06から出土したもので、土器の形態から、中期中葉～中期後葉にかけてのものに比定される。以上のことから、Ⅲ区の第1遺構面の遺構は、弥生時代中期中葉～中期後葉のものが多い傾向にある。

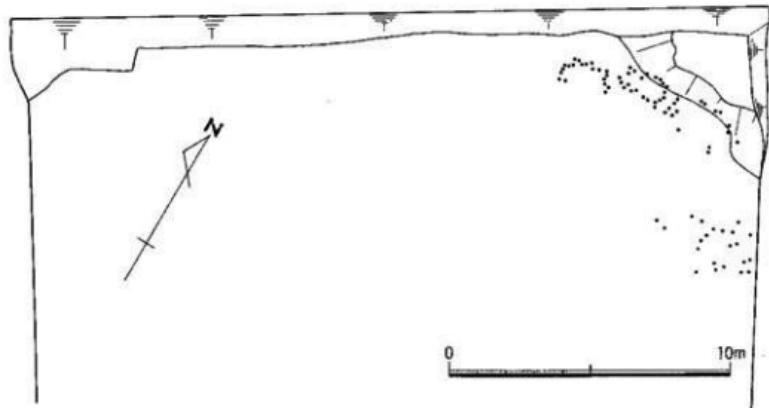
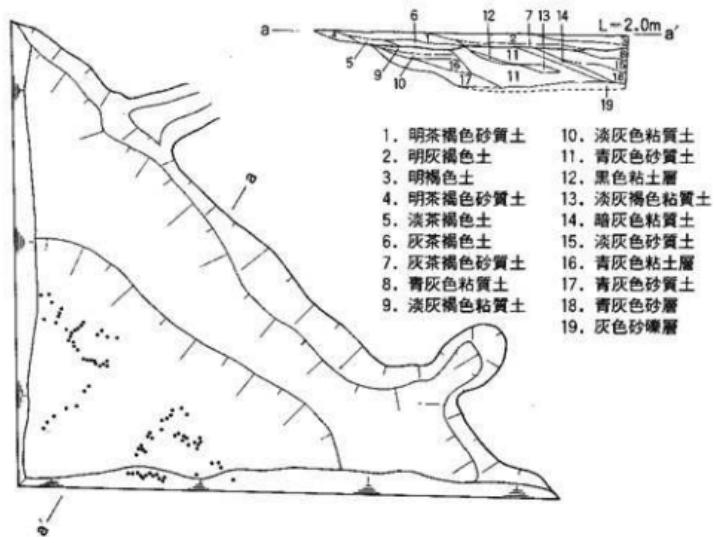
前述の遺構検出後、明茶褐色砂質土を掘り下げたところ、溝状遺構3を検出した。（SD08～SD10、第6図）SD09は、前回調査で検出された深い落ち込みの続きと思われる。土層の堆積状況は、SD08、SD09とも大きく2層に分けられ、上層は褐色土で、下層及び石器が出たし、下層は灰色系の砂層



第5図 第II調査区出土遺物



第6図 II区第2遺構面遺構配置図



第7図 旧河道円形杭列状造構配図

と粘土層が互層をなして堆積し、砂礫層で底になると考えられ、大量の土器、石器、木製品の他流木、植物種子などが出土した。さらにSD09では、下層の下面から円形杭列状遺構が検出された（第7図）。杭列は、SD09の北側肩から6～11m離れた地点で、6群あり、1群8～23本の杭を砂礫層まで打ち込んである。付近からは、土器、石器に混り木製農具の未製品が出土している。同じ様相の遺構は、松江市西川津遺跡からも検出されている。^{註1}

SD08は、西壁に阻まれ全体を窺えないが、北西部の状況から、幅3.4m、深さ1.01mで断面は掘鉢状になっている。上層は多くの土壤、ビット群に切られ、出土遺物は少ないが、下層からは多くの土器、石器、緑色凝灰岩製の管玉未製品、木製品、流木などが出土地している。出土土器は第8図に1・2・3を図示している。1は低脚付鉢形土器である。底部から緩やかに立ち上がり、口縁部はくの字に短く外反する。器壁はかなり厚くなっている。2は大型の變形土器で、口縁部は緩く外反し、胸部はあまり貼らない。口縁端部に範状工具による刻目を巡らせ、胸部上半は櫛描きによる10条の平行沈線を巡らせ、下方に刺突文を施す。3は2の土器に重なるように出土した變形土器で、口縁はくの字状に屈曲し、櫛状工具による11条の平行沈線を巡らせている。

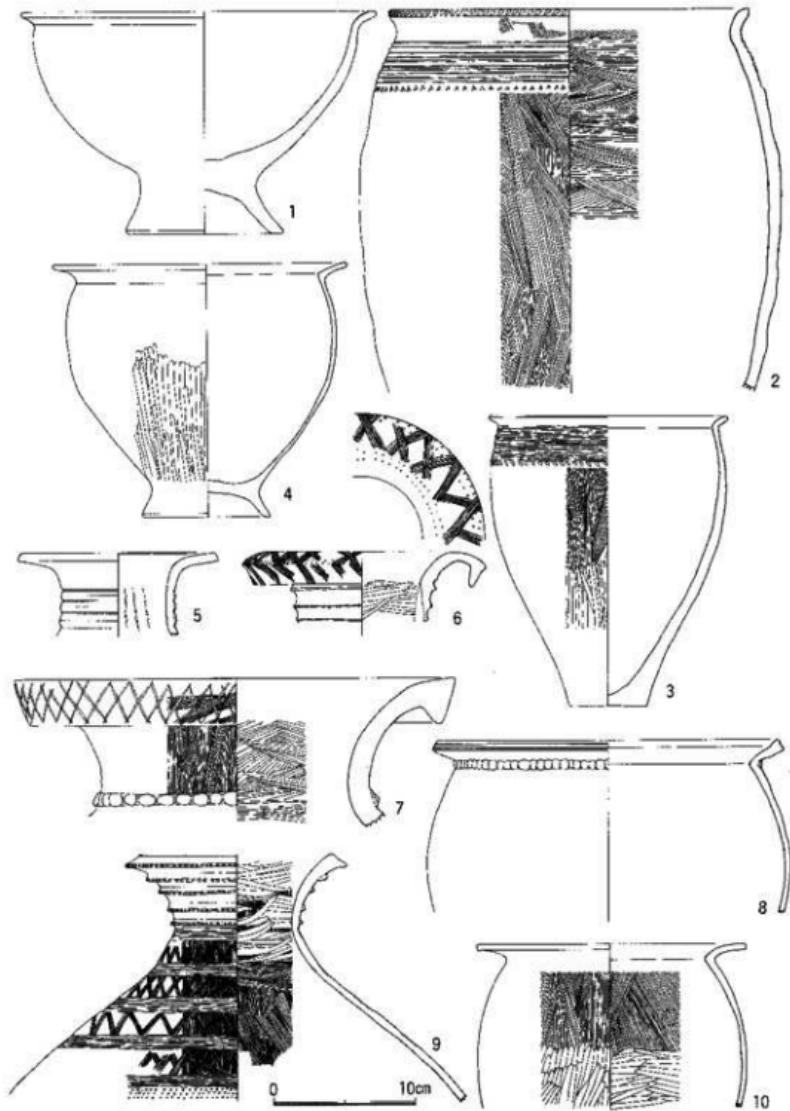
SP09の上層から出土した土器は、變形土器は4・8、壺形土器は5がある。4は低脚付で、器壁は薄く、口縁部はくの字状に強く屈曲している。8は端部がやや肥厚し、端部に凹線文、頸部に貼付突帯を巡らす。5は筒状の頸部に3条の貼付突帯を巡らす。比較的小形の土器である。その他図示できなかつたが、坏部がやや浅く、口縁部は体部から立ち上がったままで終り、口縁端部がやや肥厚する高杯形土器の杯部も出土している。下層から出土した土器の内、壺形土器をみると、6・7のように口縁部が朝顔状に大きく外反し、口縁端部外面に、櫛状工具による斜格子文を施し、口縁上端部には斜格子文や刺突文を巡らせ、頸部には、指頭圧文を有する貼付突帯を施すものが多い。總じて大形品が多いのも特徴である。9は前述した円形杭列状遺構の杭間から出土したもので、口縁がやや外反しながら直線的に立ち上がり、端部はやや肥厚し、頸部には、断面三角形の刻目突帯を施す。また、この土器は肩部の櫛描文の上をなぞるように、赤色顔料が施されている。10は、形態から中期中葉の變形土器である。他、漆を塗布した土器片が、上層から1点、下層から3点出土している。SD10は埋上が、SD09の上層と同じことから、SD09の支流だと推測される。

以上のことから、SD08の下層及びSD09の下層からは、中期中葉のものが多く、それに対し、上層はやや新しい時期のものが含まれている。

註1 島根県教育委員会「布田遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財調査報告書』1983年

註2 註1と同じ

註3 島根県教育委員会『朝鈴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』1988年



第8図 第II調査区SD08・SD09出土遺構

第Ⅱ調査区 本調査は第Ⅰ調査区の南隣に位置し、第Ⅰ調査区側から南へ21mまでは東西幅38m、その南21mは東西幅12mの範囲で調査を行い、調査区全体が旧河道であったことが判明した。また、旧河道の上面において溝状遺構を1本確認した。旧河道の堆積土からは多量の遺物が出土しており、下層で円形杭列状遺構を検出した。

溝状遺構SD01は調査区の北東隅に位置し、旧河道の堆積土を東西方向に掘り込んで作ったものである。幅0.7m、残存長1.2m、深さ約20cmを計る。第Ⅰ調査区からのびる溝状遺構との位置関係から、SD05か07の続きと考えられる。旧河道上面でSD01以外には遺構を検出できなかった。

耕作土を除去した面で精査を行ったところ、調査区中央部に灰褐色の粘質土が30mの幅で堆積し、南北の端には褐色土が灰色粘質土をはさむような形で堆積していた。東壁で両層の切合関係を見たところ、灰褐色粘質土が褐色土を浸食するように傾斜して摺鉢状に堆積していた。本調査区で検出した褐色土は第Ⅰ調査区SD09の埋土と同一のものと考えられ、褐色土層を浸食して堆積する灰褐色粘質土は、旧河道の最も新しい層である。灰褐色粘質土とその下層の灰色粘土からは遺物が出土しなかったが、若干の流木が認められた。以上の状況から幅30m程の河川が最後まで流れた後、河川自体が他へと流路を変え沼地化していった経緯が窺える。また調査区の北東隅において第Ⅰ調査区から続く旧河道の北側肩を検出した。灰褐色粘土層に浸食される以前の旧河道の堆積状況は以下のとおりである（第9図）。

上層はすでに記したとおり褐色土層で、弥生時代中期の壺や甕などの磨滅した破片や、黒曜石の剝片、石燃などが出土しているが量は極めて少ない。出土遺物は原位置を保つものではなく、河川によっておし流されたものと考えられる。

下層は灰色の粘質土層と砂層からなり、北側肩沿いに円形杭列状遺構を検出した。杭の数は80本以上を数え、径2m程度の円形状に4群に分かれ打ち込まれていた。杭の下端は河底まで達しているが、上端はほとんどが欠損しており、どの層から打ち込まれたものなのかは不明である。下層からは、土器の他、杭、容器、板状材、棒状材といった木製品、黒曜石のスクレイパーや剝片、緑色凝灰岩質の石核や管玉未製品等の石製品、分銅形土製品、植物種子、貝類等が出土した。下層から出土した土器は遺存状態が良く完形に近いものや大きな破片が多かった。遺物の出土位置は、北側の肩寄りに多く出土しており、中央部に近づくにしたがい出土密度が低くなる。

河底には粒の洗い砂疊層が堆積しており、遺物の量は下層ほど多くないが遺存状態は良い。土器では縄文時代晩期の浅鉢の口縁や弥生時代前期後半の壺、甕、中期前～中葉の壺、甕等が出土しており、比較的の古いものがみられる。この他、分銅形土製品や銅鋸形土製品の様な出土例の比較的少ない祭祀遺物も数点出土している。

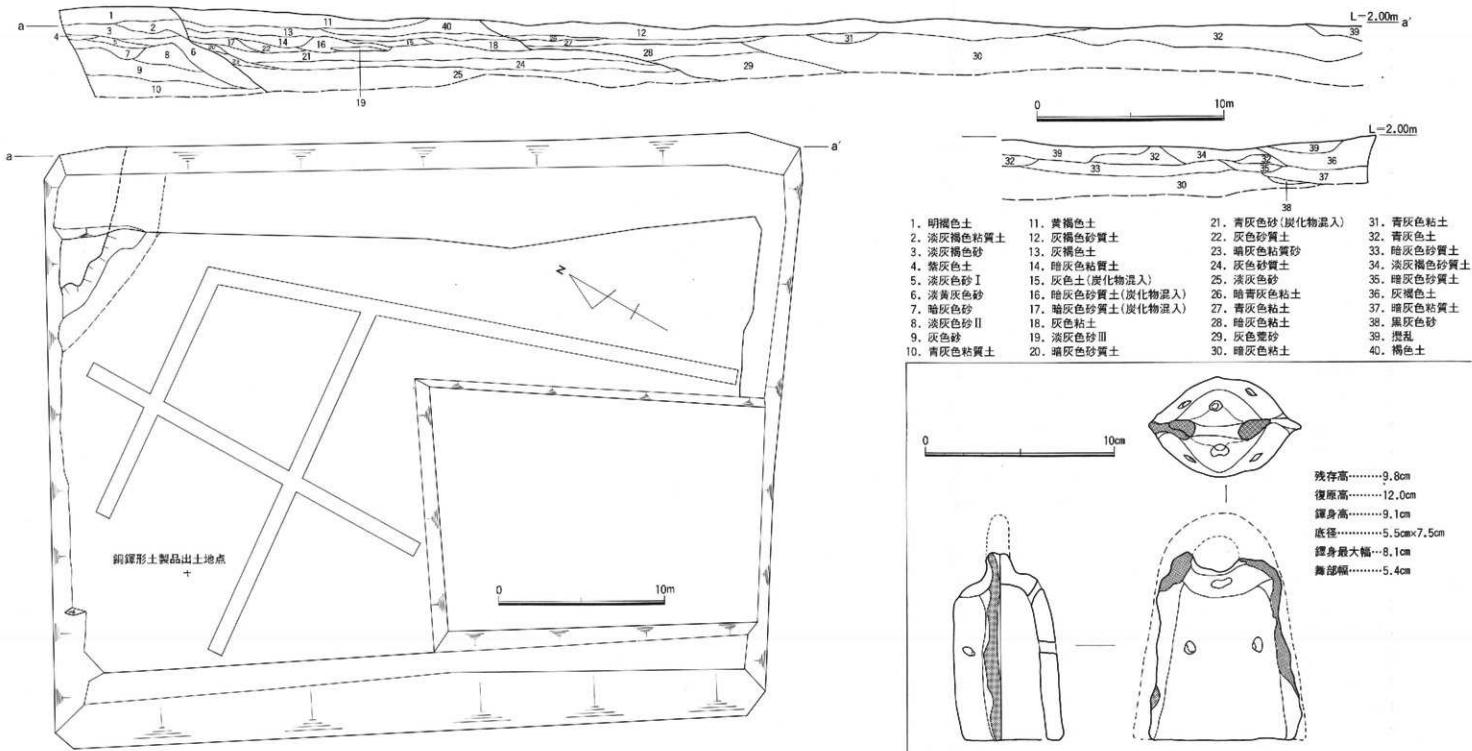
出土遺物 出上した遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、木製品、石器、管玉未製品など数多くあ

るが、ここでは下層と砂礫層から出土した弥生土器と土製品を層ごとに説明する（第11図参照）。

下層からは多量の弥生時代中期中葉から後葉にかけての土器が出土している。壺片土器は口縁部が大きく外反して朝顔状に開き、口縁端部が肥厚し口縁部内外面に多彩な文様を施すものが最も多い。第12図は口縁部外面に斜格子文を施し、円形浮文を2個単位で貼りつける。外面頸部と口縁部内面には貼付突帯を巡らせ刻目を施す。また3のように口縁部は朝顔形に外反するが、文様は胸部と頸部の境の貼付突帯のみを施すものや、6・8のように頸部から口縁部にかけて大きく外反し、胸部は扁球状を呈すものもある。6・8には施文が行われていない。1は中期中葉、3・6・8は中期後葉のものと考えられる。この他図示していないが、朝顔形に外反する口縁端部に凹線文を巡らせ刻目を施すものもみられる。甕形土器の形態も多彩である。第12図4は口縁がくの字状に屈曲し、口縁端部が肥厚し斜行刻目文をいれる。7は口縁がくの字状に外反して開き、口縁内面の屈曲部に縦がたち、端部上端がわずかにつまみ出される。口縁端部には刻目文をいれる。10・11は小型の甕で口縁部がくの字状に屈曲し、胴部がやや張り出す。口縁端部をみると、10は丸く造り出されているが11は上端をわずかにつまみ出しており、刻目文を施す。この他、4と同じく口縁端部が肥厚し、端部外面に凹線文を巡らせ、頸部には粘土紐を貼り付けたものもみられる。4・7・10・11は中期中葉、口縁部に凹線文の巡るものは中期後葉のものと考えられる。高环15・16・17は环部口縁が逆L字状に屈曲し、端部がやや肥厚する。脚部は八の字状に開き、中期中葉のものと考えられる。鉢形土器14は口縁部が内傾し端部が左右に肥厚して上部に平坦面をもつ。口縁部外面に凹線が巡る。中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。13の分銅形土製品は下半分を欠損する。表側の周縁及び内面に列点を用いた円弧文を施す。側面から裏に穿孔をいれる。この他、ミニチュア土器18・19や台形土器9も出土している。

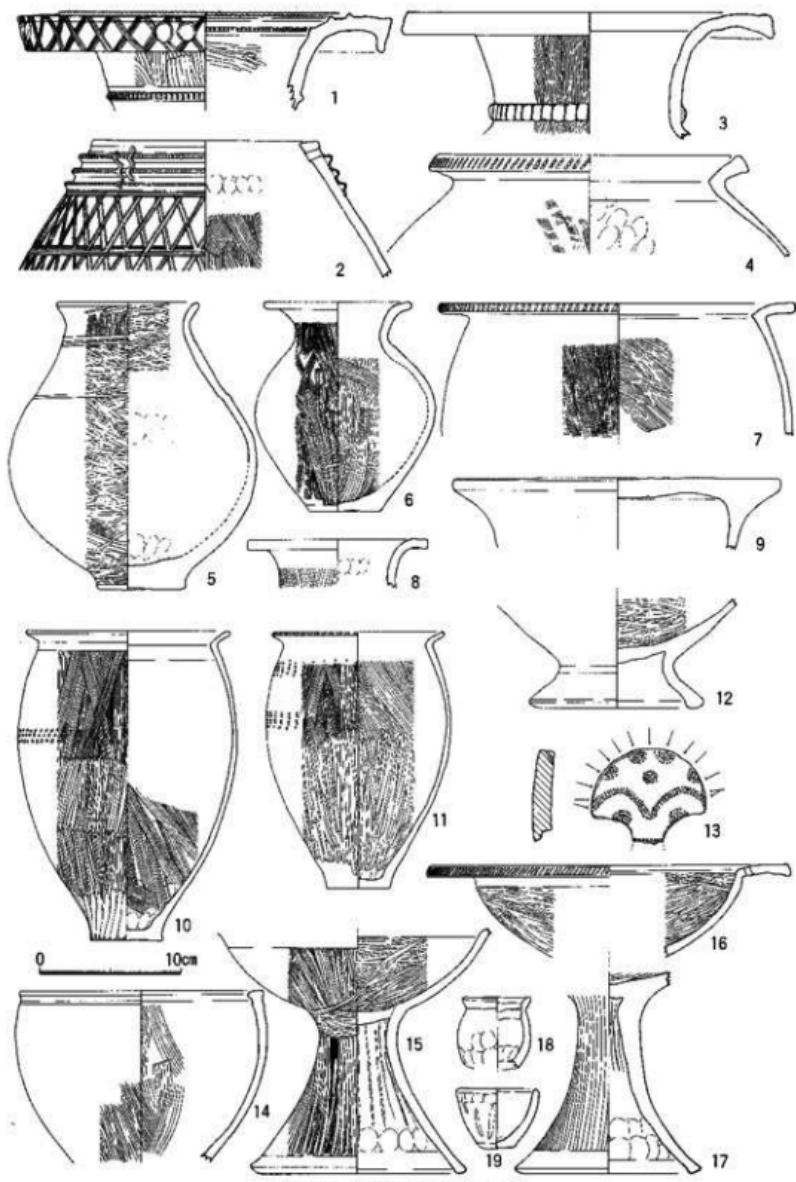
砂礫層からは弥生時代前期後半から中期中葉にかけての土器が多く出土する。2は無頸壺で、口縁部がやや肥厚し上部に平坦面をもち、頸部を貼付突帯や粘土紐で飾る。5は口縁部から緩く短く外反し、端部は丸く、頸部及び胸部上半に篦描沈線を巡らす。2は中期中葉、5は前期後半のものと考えられる。この他、朝顔形に大きく開く形態の壺が多くみられる。甕は図示していないが、胴部が張らず口縁部が大きく外反し胴部上半に篦描沈線を施す前期後半と考えられるものが多い。また4や7の形態のものも混在する。銅鋴形土製品（第10図）は、鋴と鋸をもち、身は中空で断面は杏葉形を呈す。身の両面と舞部に2個ずつ型持孔を持つ。この他、分銅形土製品や土鍤等も出土している。

また図示していないが、上層から1点、下層から19点、砂礫層から3点の塗塗土器が出土しており、器種は甕の比率が高いようである。



第9図 第III調査区遺構図

第10図 銅鑄形土製品実測図



第11図 第III調査区出土遺物

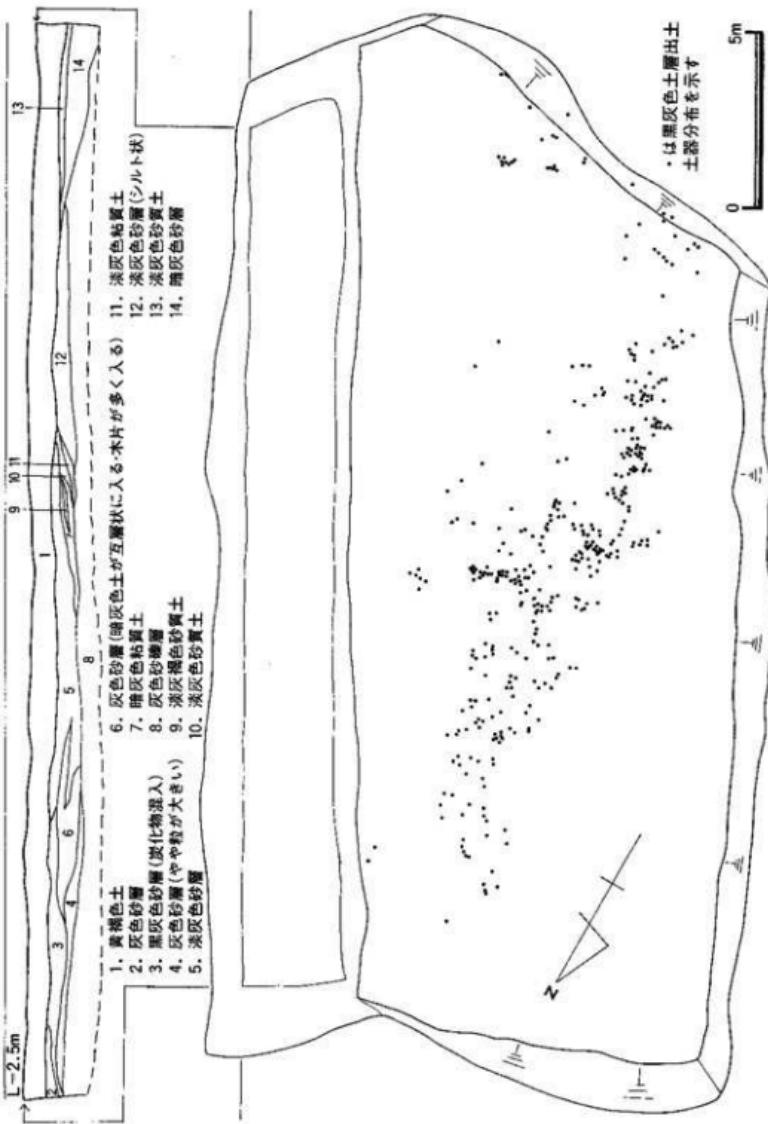
第Ⅳ調査区 本調査区も旧河道上に、上層褐色土、下層灰色土、砂礫層と堆積する状況であった。上層は1.6~2.2mの厚さで、精査したところ調査区北壁から南へ約1.5mのところで焼土1、中央部のやや南寄りでピット5を検出した。焼土中からは土器細片と黒曜石が検出されたが、ピットからの出土遺物は無かった。遺物は調査区の北側から多く出土し、南側からの出土は少なかった。出土遺物をみると、13図9の壺形土器は、口縁部が緩く外反し頸部に7条の籠描き沈線文が施される。8の壺形土器は、口縁部が緩く外反し頸部から肩部にかけて八の字形を呈し扁球状の胴部へと続く。頸部に4条、胴部に8条の櫛状工具による平行沈線文が施される。1の壺形土器は口縁部が緩く短く外反し、胴部はやや張り出す。口縁端部に籠状工具による刻目と頸部に籠状工具による3条の沈線文が施される。その他、側面に研磨を施した緑色凝灰岩管玉未製品も2点出土している。

下層は灰色の砂質土と粘質土が交互に堆積していた。調査区中央部分の下層上面に、南北約11m、東西約4.5mの梢円形状をなし、20~30cmの厚さの、黒灰色土層を検出した。木の葉や胡桃などの炭化物を多く含み、腐食土と考えられる。この黒灰色土を中心に下層の上面では多くの遺物を検出できたが、遺構は無かった。まず黒灰色土上面から黒曜石の割片が約40片出土し、その下からⅣ区全面に涉って土器が散在している(第12図参照)。土器片は約400出土したが完形品は少なかった。その他、緑色凝灰岩と思われる管玉未製品が1点と流木と思われる木片が8片出土し、櫛の一部分と思われる朱塗りの木片も出土した。黒灰色土層出土土器7は、口縁部が大きく外反し、長削形を呈し最大径はほぼ胴部中位に位置する。2の壺形土器は、口縁部がやや緩く外反し胴部は細くすぼむものである。その他図示できなかったが、漆塗りの壺形土器口縁4点と底部1点を出土した。

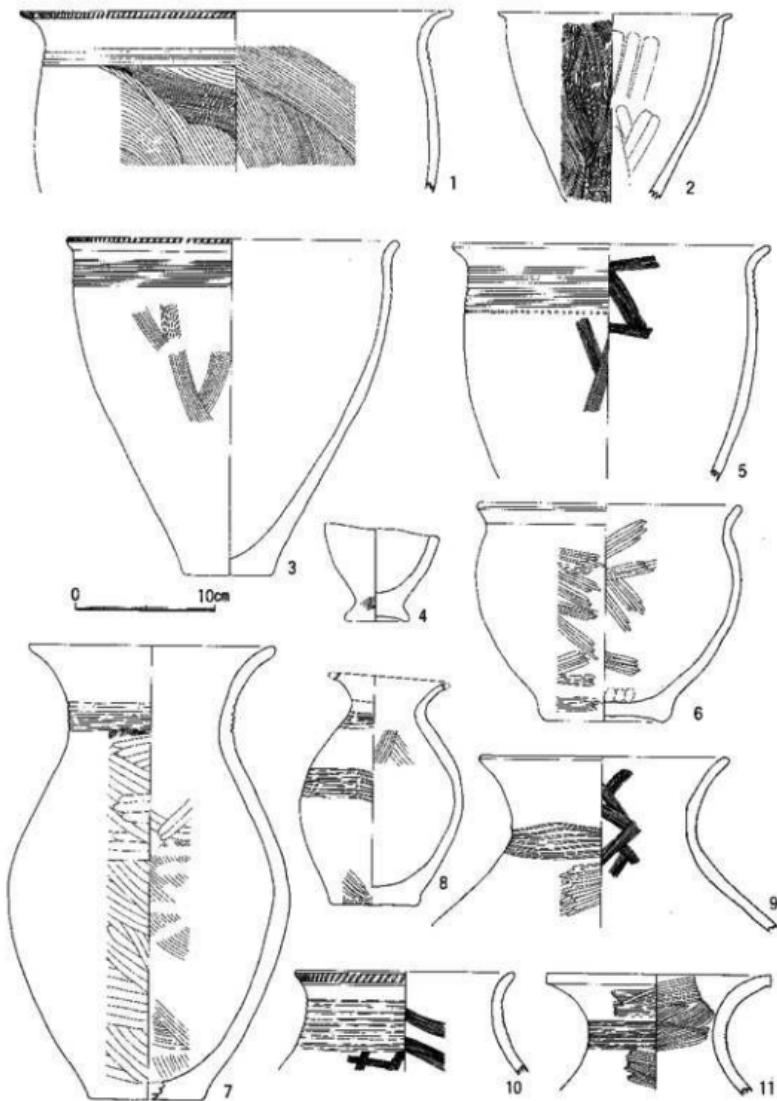
黒灰色土層より下の層でも多数の遺物が出土している。6の鉢形土器は口縁部が緩く短く外反し、胴部は僅かに張り出す。10の壺形土器は、口縁部が緩く外反し口縁端部に籠状工具による刻目を、頸部に籠状工具による9条の沈線文を施す。11の壺形土器は、口縁部が緩く外反し頸部は筒状を呈す。頸部には籠状工具による8条の沈線文を施す。4は器高7cmの小形脚付杯である。脚を持たない小形土器はⅢ区で数点出土しているが、脚付は4の土器を含めてⅣ区で2点あった。5の壺形土器は頸部に籠状工具による7条の沈線文とその下に円形の刺突文を施させている。3の壺形土器は、口縁部が緩く短く外反し、胴部は僅かに張り出す。口縁端部に籠状工具による刻目と頸部に7条の籠描沈線文が施される。その他、完形品のものと、1/5を残すのみの木製椀が、各1点出土した。

砂礫層は旧河道の河底と考えられ、少量の上器と流木の他、目立った遺物の出土は無かった。

出土土器は上層から下層を通して、弥生時代前期後半から弥生時代中期前葉のものの比率が高く、壺形土器に比べると壺形土器の方が個体数が多い傾向にあった。



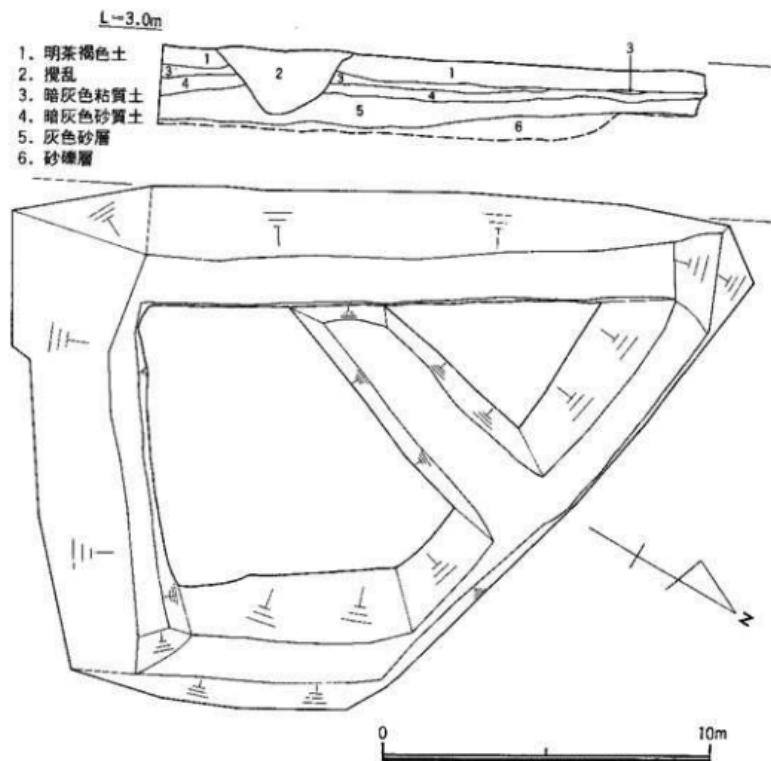
第12図 第IV調査区遺構図



第13図 第IV調査区出土遺物

第V調査区 本調査区は、今年度調査区の中で最も南側に位置するが、土層は基本的に第Ⅲ～Ⅴ区で検出した旧河道の堆積状況と同様である。上層は茶褐色土、下層は上から暗灰色粘質土、暗灰色砂質土、灰色砂層と3層に分かれ、その下が河底と考えられる砂礫層であった。V区の中央部分には旧水道管が通っており、調査区を二分する格好となり調査面積を削減せざるを得なかった。V区からは遺構も無く、旧河道の南側岸も検出できなかったことから、Ⅲ区に北岸をなす旧河道は河幅が130m以上あり、旧河道の堆積作用によって形成されたものであると考えられる。上層・下層からの遺物の発見はほとんど無く、砂礫層から土器が僅かに出土しただけにとどまった。

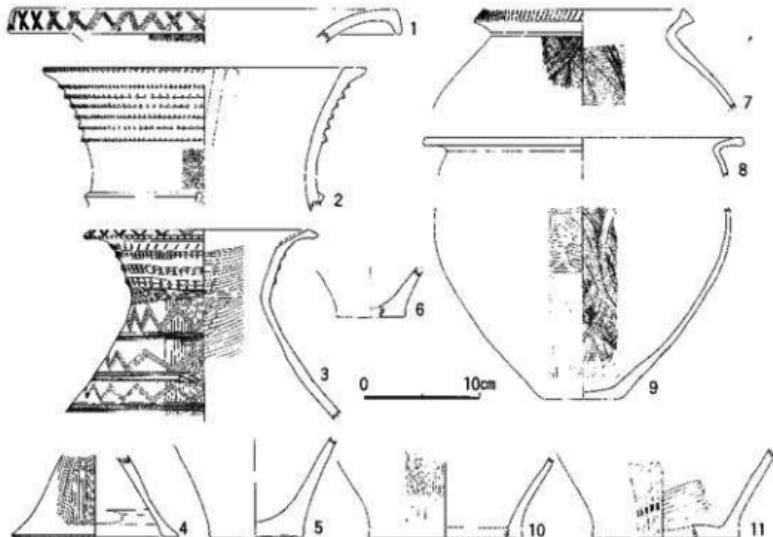
V区の主な出土遺物として以下のものがあげられる。15図1の壺形土器は、口縁端部を逆L字状に肥厚させ、口縁端部外面に櫛描きの3条の斜格子文を施している。2の壺形土器は、口縁部が極く



第14図 第V調査区遺構図

外反し端部が肥厚して平坦面をつくり内傾していく。口縁端部に籠状工具による刻目を入れ、頭部上方には刻目を入れた貼付突帯を6条巡らせ、頸部中央部には粘土紐を付けた貼付突帯を1条確認できる。3の壺形土器は口縁部が漏斗状に開き、端部は逆L字形に屈曲する。頭部は短く筒状を呈し胴部へと広がる。口縁端部平坦面に櫛描の山形文、口縁部外面には刻目が施されている。頭部には籠状工具による刻目を入れた突帯が4条巡り、胴部上方には籠状工具による山形沈線文と5条の平行沈線文が交互に施される。4は高环形土器の脚部で、裾端部には籠状工具による刻目が入る。5・6・10・11は底部のみの出土のため、土器の形態は不明である。7の壺形土器は、口縁部が強く字形を呈し、端部が肥厚して大きな平坦面を持ち、胴部は大きく球状に張り出るものと考えられる。口縁端部には籠状工具による斜行文が施されている。8の壺形土器は、口縁部がく字形を呈し、端部に丸みをもつものである。9の壺形土器は胴部が扁球状に大きく張り出している。その他、図示できなかつたが出土したものをあげてみる。口縁端部が緩く外反し、胴部上方に5条の籠描沈線文を施した壺形土器の口縁部や、口縁が大きく外反し、端部が逆L字形に屈曲し、口縁端部及び内面に3本単位の櫛描き斜格子文が巡り、端部に円形浮文を貼付した壺形土器の口縁等があった。

以上、V区から出土した土器について述べてみたが、原形に復し得るものも無かった。



第15図 第V調査区出土遺物

むすび

今回の調査で、第Ⅰ・Ⅱ調査区からは弥生時代中期及び古墳時代の遺構、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ調査区からは旧河道をそれぞれ検出し、多くの出土遺物を得た。特に旧河道の遺物包含層からは遺存状態の良い土器や木器、石製品、種子など多岐にわたる遺物が出土しており、弥生時代前期後半から中期後葉の集落の生活状況を復原する上で多くの知見を得ることができた。

出土土器の時代から見て、布田遺跡の集落は弥生時代前期後半頃には営み始められていたと考えられるが、この頃の遺構は検出できなかった。布田遺跡の集落は中期に隆盛を迎える。中期前葉の遺構は土壤1しか検出できなかつたが、中葉になると東西に走る溝状遺構や土壤群、ピット群が穿たれ、堀立柱建物も築かれる。出土遺物の量も中葉から後葉にかけてのものがもっとも多く、集落が栄えた様子が窺える。また、土壤内や旧河道包含層より緑色凝灰岩質の管玉未製品が多数出土しておおり、前回の調査同様、集落内での管玉製作の事実を確認した。土壤群や復原した堀立柱建物の中にも管玉製作に関連したものがあったのではないかと推察される。この後、弥生時代から古墳時代前期の遺物はみられず、集落は一度断絶した後、古墳時代中期に再びこの地に集落を営んだものと考えられる。

旧河道は、幅130m以上に及ぶ大河で、集落の所々にもこの河に注ぐ支流が流れていたものと思われる。旧河道へは短期間で泥砂が堆積したようであり、包含層とそれを穿つて作った遺構との間にはほとんど時期差が認められなかった。旧河道は意宇平野の北から南へと流れを変えたといつて考えられており^(註1)、布田遺跡の南側に位置する夫敷遺跡では古墳時代中期の河道が確認されている。^(註2)また、布田遺跡の西側の上小紋遺跡からは、弥生時代後期の水田跡下層から繩文時代晚期や弥生時代前期の土器が出土する砂礫層が確認されており、本遺跡の上流にあたる地点だと考えられ、徐々に当時の地形も復原されつつある。来年度は、遺跡の中心と思われる部分を調査することから、布田遺跡の集落の様相がさらに詳細に解明できるものと考えている。

註1 烏根県教育委員会「布田遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』1983年

註2 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査報告』1970年

註3 烏根県教育委員会「夫敷遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』1988年

註4 烏根県教育委員会「上小紋遺跡」『北松江幹線新設工事、松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財調査報告書』1987年

図 版



1.意宇平野遠景(西より)



2.第Ⅰ調査区
遺構発掘状況(東より)



3.第Ⅰ調査区
SK-01遺物出土状況

図版 2



1. 第Ⅱ調査区
第1遺構面検出状況
(北西より)

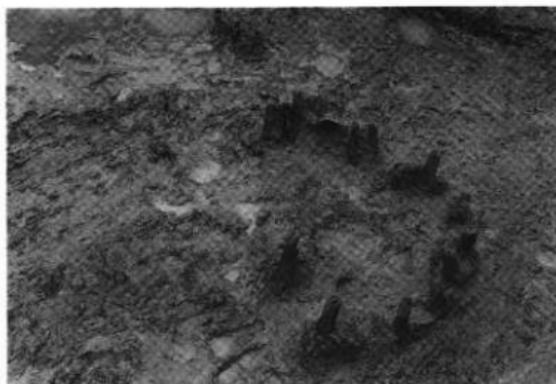


2. 第Ⅱ調査区
第2遺構面検出状況
(北西より)



3. 第Ⅱ調査区
SD-08遺物出土状況

1. 第Ⅱ調査区
円形杭列状遺構検出状況



2. 第Ⅲ調査区 SD-01完掘状況
(東より)



3. 第Ⅲ調査区
円形杭列状遺構検出状況



図版 4



1. 第Ⅲ調査区
銅鐸形土製品出土状況



2. 第Ⅳ調査区
黒灰色土層遺物出土状況
(南東より)



3. 第Ⅳ調査区
同上北側遺物出土状況



1. 第IV調査区遺物出土状況

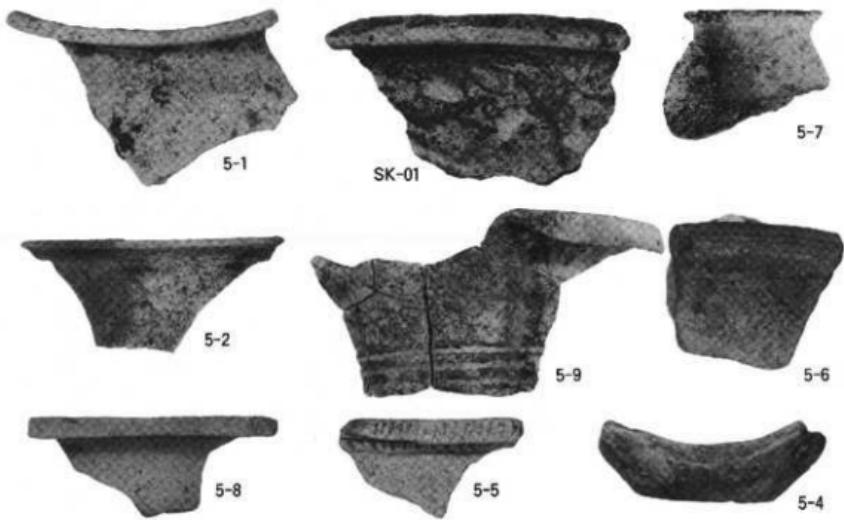


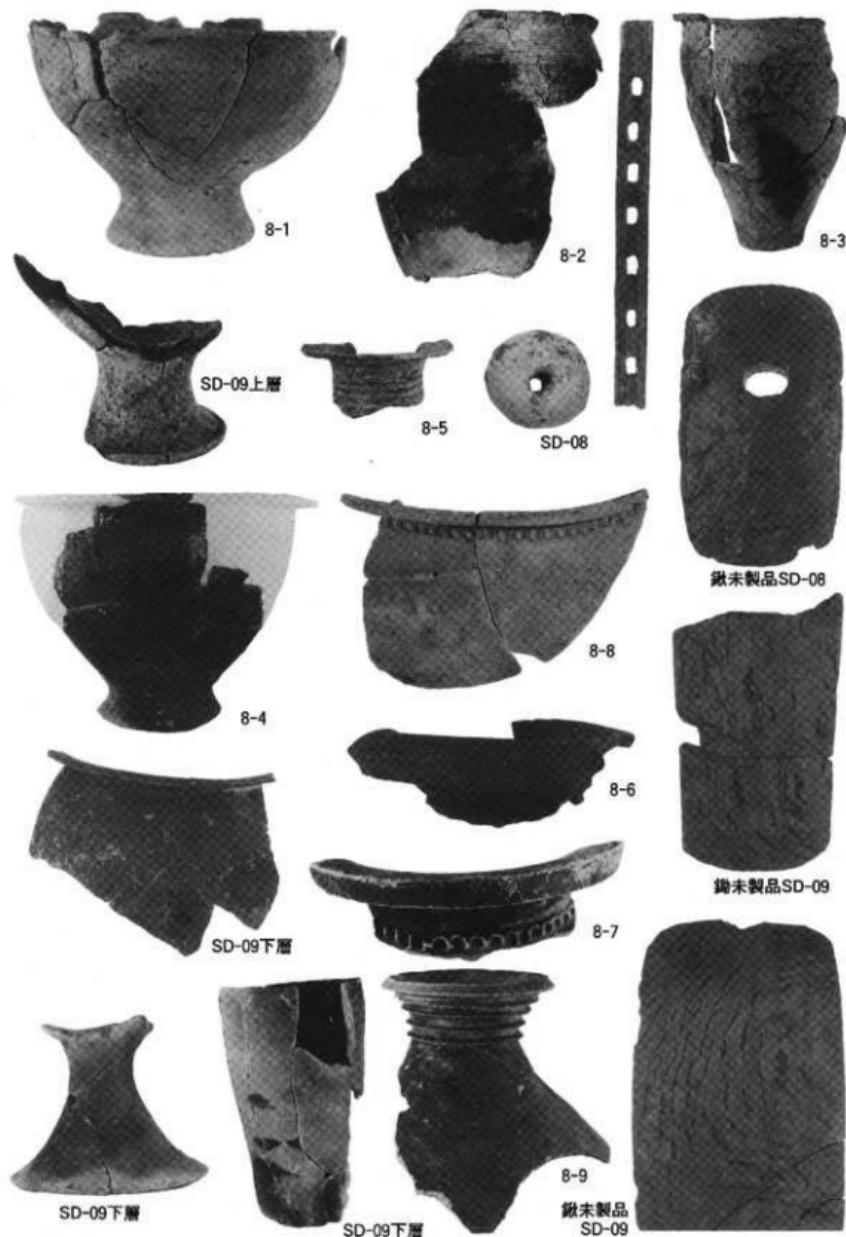
2. 第V調査区完掘状況



3. 第V調査区遺物出土状況

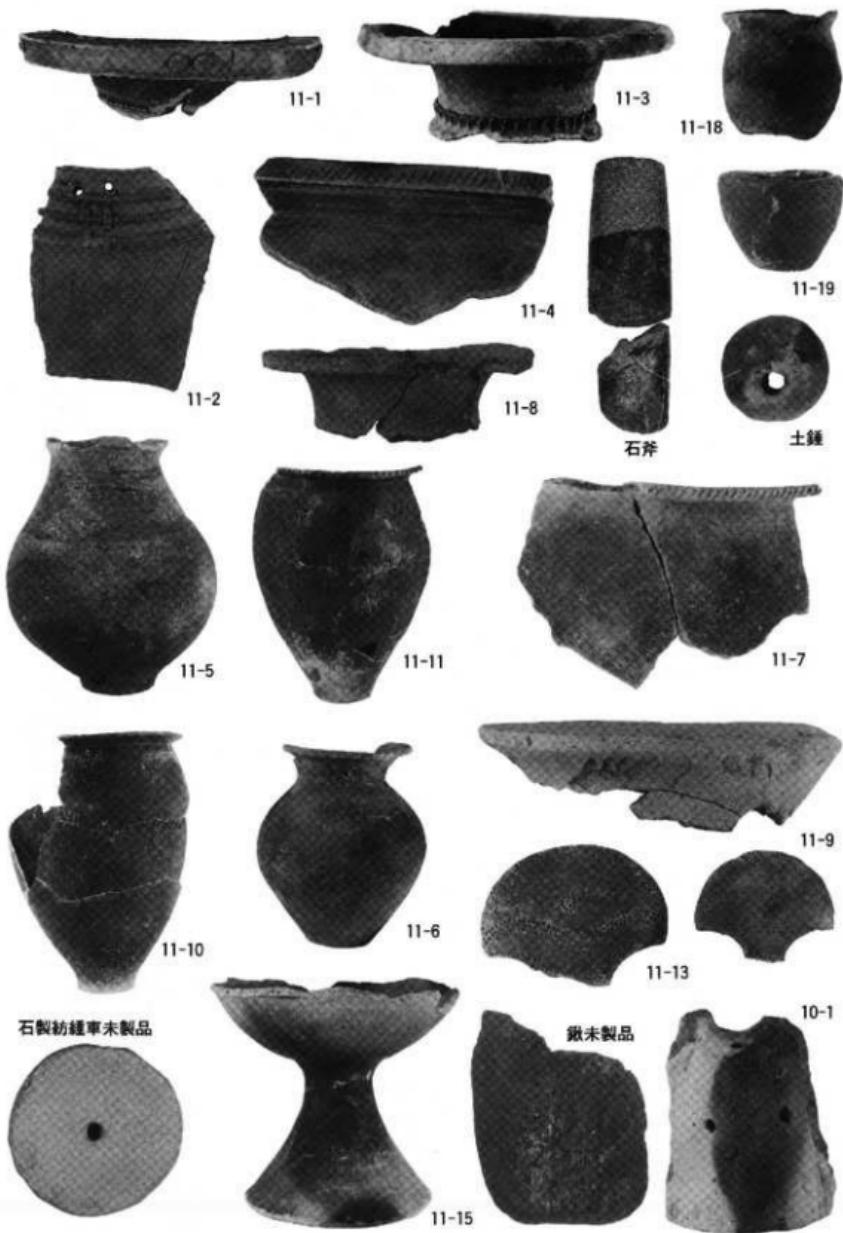
図版 6



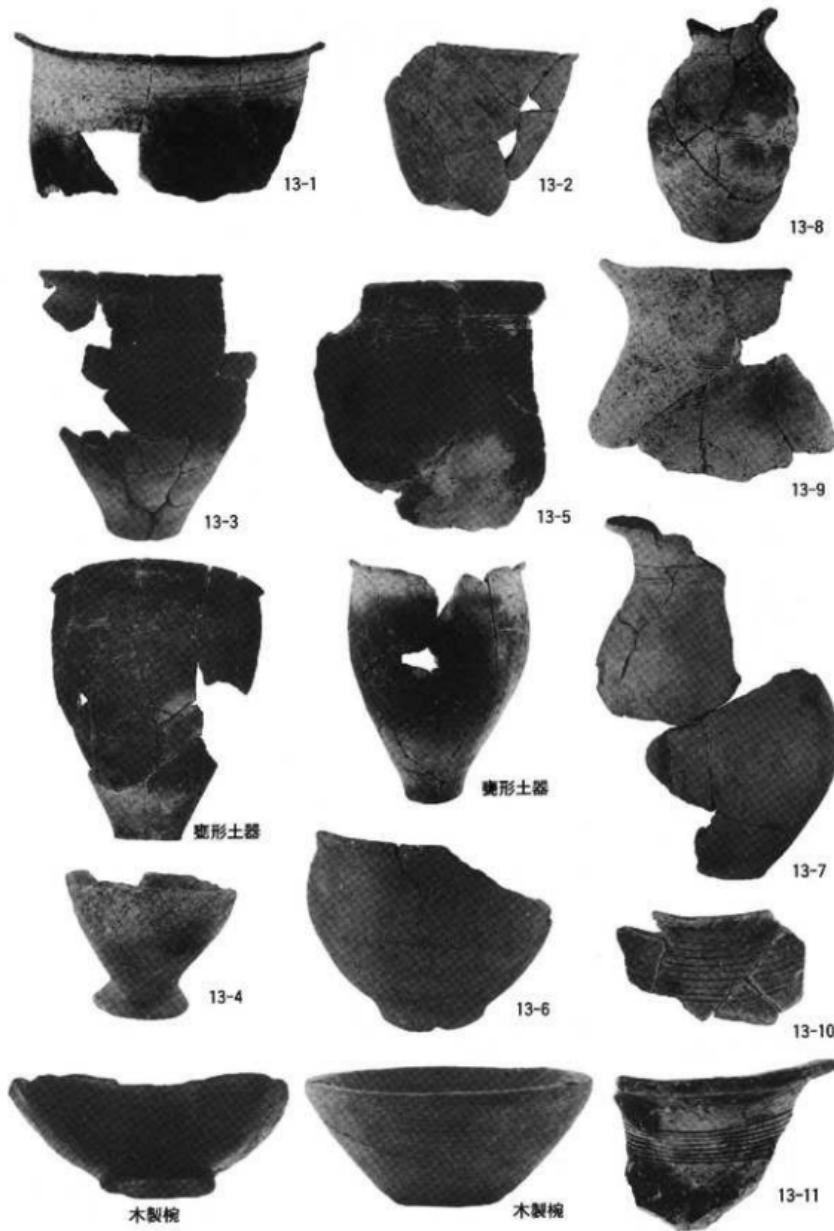


SD-08・SD-09出土遺物

図版 8

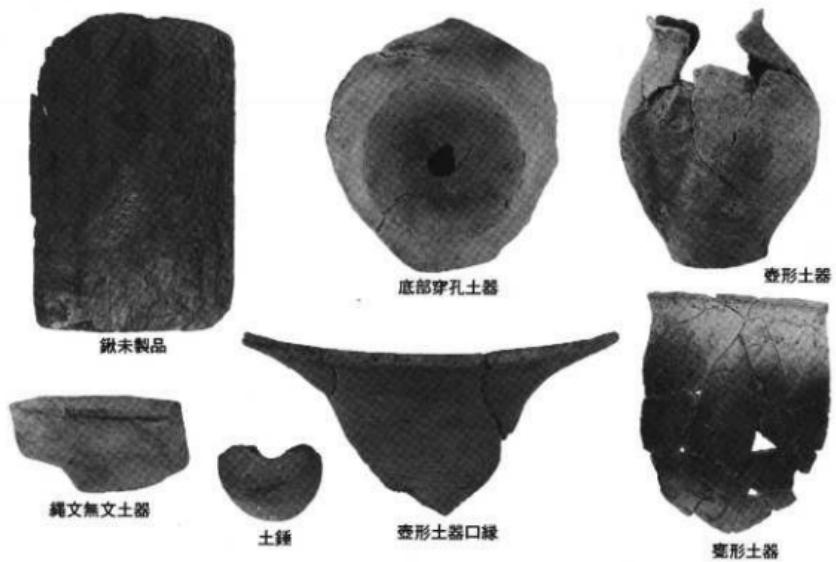


第Ⅲ調査区出土遺物

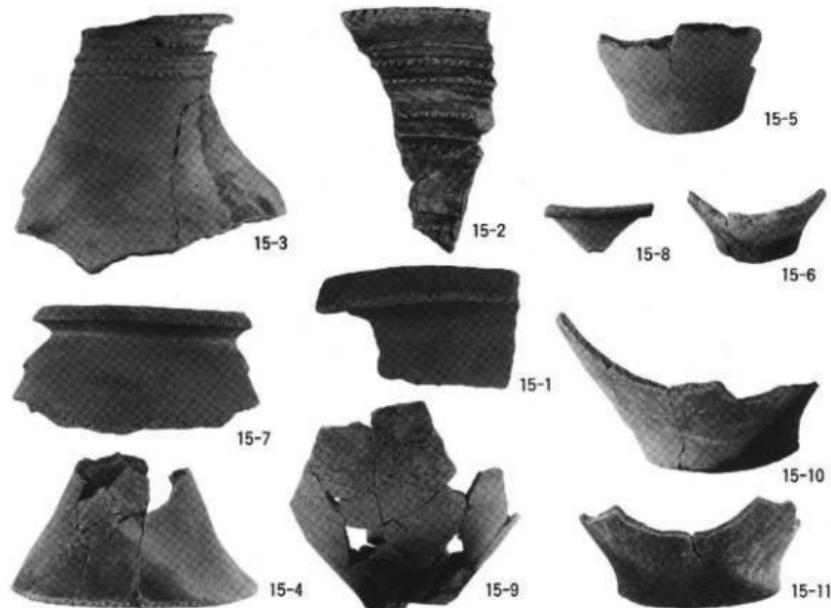


第Ⅳ調査区出土遺物

図版10



第IV調査区出土遺物



第V調査区出土遺物

平成元年3月 発行

国道9号線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

編集・発行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

印刷・製本 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89番地